

## IV. ゲスト研究会

日本体育協会会長 高原須美子氏講演会 (1994年2月17日)

### 日本スポーツの現状と展望

今日は私の一方的な話ではなく、皆様からの日本のスポーツへの期待、体協への希望なども聞かせて頂きたいと思いますので、話はできるだけ短くさせて頂いて、きっかけづくりというようなことにしたいと思っています。

実は私が昭和31年の卒業、娘は3年ぐらい前に一橋を卒業しております。私の娘への教育方針はただ一つインディペンデントということでした。たいへんインディペンデントに育ちまして、勝手に最後になって一橋を受けるといって受け、受かったのはいいのですが、その後も就職は自分で決め、結婚する相手もさっさと決め、最後にお仲人を早川先生にとこれもインディペンデントに決めてまいりました。

その娘がたいへんスポーツ好きでして、大学時代には早川先生にスキーにつれて行って頂いたということですし、小学校の時から高校野球に夢中になって甲子園まで観戦に行きました。そのようなスポーツ好きでして、それにつられて私もいろいろとスポーツとは関係してきましたけれど直接的な関係というのはございませんでした。体協の会長になりましたら、何かスポーツをやっていたんですかと聞かれて、答えたのがバドミントンです。今は1割ぐらいは女子学生がおりますから、女子学生への体育は可能と思うのですけれども、私の時には女子学生が私の学年で450人中8人でして、次の年には0、その次は2人と、女子学生が1%以下というような状況だったものですから、体育の先生がたいへん困られまして、どうやって女子学生に単位をやるのかたいへん腐心をなさったわけです。隅田川へ行ってボートをこいでくれば何時間、富浦へ行って泳げば何時間、揚げ

句の果が体育会へ入れれば何時間かくれるということだったんですね。女子学生のうち仲のいいのが4人ぐらいいまして、女の子がやるのだからバドミントンくらいがいいだろうかということで、大挙してバドミントン部に入りました。そうしますとそれしか選手がいないわけですから、国公立戦というとその4人がこのこでいて試合をしてくるといふかたちだったわけです。そこでバドミントンというのが私の唯一のスポーツ歴ということになっているわけです。あれはやってみるとたいへん過激なスポーツでして、コートの中を走り回って、テニスは勝手にボールがとんでいってくれるんですが、バドミントンはあの羽根をひっぱたかないと飛んでいってくれないわけですからたいへん力がいらいます。卒業してからも暇があれば娘を相手にしてやったりはしていたわけです。

そういったスポーツ歴のない人間がたまたま人選に困ったとはいいいながら、体育協会の会長になったのは、これからお話しする日本の経済発展との関わりからではないかと思うわけです。

日本体育協会は1911年に加納治五郎さんが、その直後のストックホルムのオリンピックに備えて、オリンピック選手の選定と国民スポーツの振興というこの二つを掲げてスタートさせた団体です。2代目が岸清三さん。その岸さんの寄付で岸体育館が出来、それが御茶ノ水から原宿に移転して、その中に体協が入っているということで、体育協会はかなりこの岸さんの寄付というか基金で出来ている面があるわけです。1911年にスタート致しまして、私が12代目の会長になって、女性は初めてということになっております。私の前の会長の青木半治さんは陸上競技連盟の会長と

いうことでスポーツ団体から出ておられますし、その前はスポーツに関係のある政治家、たとえば河野謙三さんとか、本学の卒業生だと石井光二郎さんがやってらっしゃいます。そういうかたちで従来はスポーツに関係のある政治家あるいはスポーツ団体の長というのが会長になっておりまして、12代目になりまして初めてスポーツに関係のない会長が誕生しました。

私はスポーツと経済の発展段階はお互いに関係しながら動いているのではないかと考えております。経済の発展段階の初期というのはハングリースポーツであり、なおかつその国の力をスポーツによって外に示すという時期ではないかと思うわけです。日本も戦後全くの廃墟になってしまったわけですが、その中から本当のハングリースポーツで勝ち抜いて、しかもそれが日本という国を世界に示す国威発揚につながり、輝かしい人物になったのが古橋広之進さんだと思うわけですね。フジヤマノトビウオとして日本の力を世界に示してくれました。あの方は世界新記録を32つ作ったそうで、“世界記録量産男”とまで言われたという、それぐらい力を発揮していたと思うのです。その次の日本の国威発揚は東京オリンピックでした。あの時に東京オリンピックということで極東に日本という国があるということが世界に知れ渡ると同時に、“東洋の魔女”と呼ばれたバレーボールの選手が活躍し、これまた日本の力を世界に示すきっかけになりました。こういう段階では勝敗にこだわり悲壮感が漂っていたと思うわけですね。日本の選手というのは勝っては泣き、負けては泣き、ということで常に悲壮感が漂っていたと思います。まさに国の威力を自分の肩に背負ってスポーツをしたのではないのでしょうか。例えば経済発展途上国、あるいは社会主義国の東欧、旧ソ連、中国というような国々も一時期はそういうかたちでスポーツで世界に存在を示そうとして、スポーツに対してかなりお金をつぎこんでいたと思います。今の発展途上国でいいますと、サッカーのワールドカップで日本はアジア予選の最後に同点にされて出れなくなりましたけれど、あの時

もイラン、イラクというような国々から来ている選手たちは国を背負って立ち、負けて帰るとムチうち刑だとかいうことがいわれるぐらい国を背負ってきていたのではないかなと思うわけです。

ところが経済発展が進むにつれ、スポーツはその国の力を発揮するものでもないし、ハングリーによって力を出すという時代でもなくなってくるというこの二つの面です。経済がある程度発展すれば、経済によって国の存在を示せますし、経済が発展してくれば当然ハングリーでもなくなるということでスポーツの在り方が変わってきていると思うわけです。そこで経済がある程度発展した国では皆でスポーツをエンジョイするというふうに変っていくのではないかなと思います。日本も現在そういう段階にきているわけですが、日本は本当にスポーツを楽しむという点では他の国々よりちょっと劣っているのではないかな、まだまだ今までのしっぽをひいてある程度悲壮感を漂わせて、国の力を示すのに使うというような面が残っているのではないかと考えております。

経済の統計でみますと、国の豊かさを示すのは一人当たりの国民総生産（GNP）です。日本の場合1987年にアメリカを抜きまして、今、スイス、ルクセンブルグに次いで第3位が日本ということになっています。この間、生涯スポーツの世界会議がありまして、ドイツの方の基調講演を聞いたのですが、統計を示しておられました。一人当たり国民総生産とスポーツを楽しむ時間というのはきれいに比例するわけですね。日本がちょっと遅れているとさっき申し上げたのは、日本は第3位でありながらスポーツをする時間は第3位ではなかったわけです。でも大体の線を取りますと、一人当たり総生産という経済的な豊かさと、スポーツを楽しむ時間というのが比例をしています。そこで、先進国を中心とした集りでは、合言葉はスポーツ・フォー・オール、会議があるとスポーツ・フォー・オールとくっついています。そのためのビデオが出来ていて、皆で見るというような世界会議が多いわけです。それを日本では

どういうわけか、生涯スポーツと訳しています。生涯スポーツとスポーツ・フォー・オールとはちょっと受けるニュアンスが違うんじゃないかと思うのです。生涯スポーツというと高齢化社会になって年を取ってからもスポーツが出来て健康維持に、というかたちに受け止められがちなので、私は英語を使うのはあんまり好きではないのですけれども、スポーツ・フォー・オールの方が分りいいのかなという感じがいたしております。そういうかたちで、私はいまや日本もスポーツ・フォー・オールの時代に経済的段階としては入ってきていると思っています。

今から3、4年前に日本体育協会の組織の一部であった日本オリンピック委員会（JOC）が独立を致しました。JOCの方は、さっき申上げた国の力を外に示すような強い選手の強化団体として別の組織になったのだと思います。JOCの長は世界に名を轟かせた古橋広之進さん。JOCの会長は競技団体の有名な選手がふさわしいのだと思うわけです。そうしますと今度はJOCが抜けた体協というのは何だということになりまして、ここ何年か任り方がはっきり出来なかったのではないのでしょうか。でも私は選手の強化というのがJOCの方に移りましたら、それこそ日本体育協会というのスポーツ・フォー・オール、国民スポーツという一番の草の根のところを担当する団体になったということで、性格がはっきりしたのではないかなと思います。私がスポーツの関係者でないのに長になったのは、日本体育協会が国民スポーツの振興をするというかたちの組織になったために、競技が強いとか、選手として有名だったとかいう必要はなくなりましたし、スポーツを使って国の威容を世界に示す必要もなくなったからです。政治家になってもらう必要もないということで、私が日本体育協会の会長になったのではないかと思います。

内輪の会ということで申し上げますと、青木半治前会長が70才定年という制度を作られたわけです。ところがご本人がもう70才をこえておられ、定年制を作った人が定年をこえているという声が

青木さんの耳に入ったらしくて、急に去年の3月に辞めてしまわれたわけです。その後選考委員会を作りまして、選考して、4ヵ月間空席だったのです。スポーツの世界って意外と閉鎖的で意外と高齢化しているのです。閉鎖的ということでは、競技団体で女性の長がいるのはなぎなだけです。各競技団体にも女性の役員はいないという状況になっているわけです。また70才の定年制をひいて、競技団体で探すと70才以上でひっかかってしまう。もう国民スポーツの時代なのだから財界からがいいだろうと探しますと、財界活動をしている方は70才を越してるんですね。現役で経営をやっている60才代の方は体育協会みたいなボランティアなんか出来ない、ということで選から外れ、なかなか決まりませんでした。1911年に出来て80年以上歴史のある団体に女性の役員が一人もいなかったのですが、でもさっき申上げたようにスポーツ界って閉鎖的で下から上がってくる役員には女性が入りにくい要素があったものですから、青木半治前会長に頼まれて、私は監事を2年間やっていました。そこで選考委員会が名簿をもういっぺん見回したら、ここにいるのではないかということで私に矢がとんできてしまったのです。

私としては大変な団体だということを知っていましたが、お断りをしたかったのですが、先にNHKのテレビのニュースで流れてしまいました。私がゴルフ場のロッジでテレビを見ておりましたら、「日本体育協会の会長に高原須美子さんが内定しました」と。一緒に行っていたゴルフ仲間は、お須美さんは人がいいからこれでは断れないだろうな、ということになりまして、その後続くニュースを聞いてさらにびっくり。「前向きに検討するという返事が来ております」と言うのです。これは経済企画庁長官の時も同じであり、2度ひっかかりました。先にマスコミに流れてしまわれて断れなかった上に、4ヵ月間空白だったものですから後1ヵ月経つと国民体育大会が始まるわけなのです。そういたしますと、国体のために一生懸命頑張った選手が賞状をもら

ったら会長代行とか会長代理という名前ではかわいそうだな、気の毒だなということもありまして、私のゴルフ仲間が言うように人の良さをそこで発揮してしまひまして引き受けたということなのです。そのバックにはさっき申上げた経済との関わりあいの変化がなければ、ここでスポーツ歴がなく、女性であるということがハンディキャップになったのではないかと思います。後で聞きましたら選考委員会では女性、男性ということは全く話題にならないで、適任であるということで決まったということで、女性を売り物にする気はなかったようです。

私は体育協会会長として、スポーツ・フォー・オールということで国民スポーツの振興をやっていくべきだと思っております。今、宮城県の鳴子でスキーの国体をやっております。JOCが強化した有名な選手はリレハンメルの方に行っておりますので、本当の草の根の各県の代表が滑っているわけです。でもその中から4年後の長野冬季オリンピックの選手が出てくるのではないかと期待しています。JOCが独立して今対等な関係になっているわけですが、草の根でスポーツが盛んになっていくと当然強い選手が出てくるだろう、強い選手が出てくるとやっぱりスポーツは素晴らしいなということで草の根も広がって行くのではないかと、鶏と卵とどっちが先か判りませんが、そういうスポーツは盛んになっていくのではないかと思っています。小さい時からサッカーボールを蹴っているというかたちになってすそ野が広がっていきませんと、強い選手も出ていかないのではないかと思っておりますので、日本体育協会が草の根を支えて、強い選手がJOCから出ていく、それがまた体協の方にいい影響を及ぼすのではないかと思っております。

日本体育協会は組織と致しましては、競技団体が50近く加盟しております。陸上競技連盟、水連、サッカー協会といったような競技団体、アーチェリーだとかクレードとかいろいろ覚えきれないほどのスポーツが入っております。正確にいうと48と思います。それら競技団体が加盟致し

して縦の組織になっております。そして横の地域の組織としては、各都道府県体育協会が加盟致しております。その都道府県体育協会の下には市町村体育協会がございますので、そういうのを勘定致しますと、2200位の加盟になります。形としては都道府県体育協会とスポーツの競技団体が加盟して成り立っているわけです。私は、競技団体と都道府県体協とがうまくかみあって、これからは地域を中心としたスポーツというものが草の根のスポーツとしては大事になってくるのではないかと思っております。今まではどちらかというところと体育というのは学校単位であり、それから競技をするときには企業対抗というかたちになっていたわけですが、ヨーロッパの例なんかを見ますとクラブとかシューレというようなかたちで地域のスポーツが盛んになって、そこからやがて頂点に行くというかたちになっています。

そのきっかけを作ったのは去年のJリーグではないかと思ひます。チームには後ろに企業がおりますけれども、企業名を出してひんしゅくを買ったのは読売だけでして、あとは全部地域の名前で呼んでいます。地域の名前で呼ぶということを考えた川淵チェアマンは経営者としても（スポーツマンとしても立派だったのでしょ）業績を挙げてらっしゃいます。発想がいいというかすばらしいなと思ひているわけです。私もJリーグのオープンの際にはまだ体協の会長ではなかったのですが、券を頂いたので娘と二人で見に行きまして、川淵チェアマンの開会の挨拶を聞いたのです。そうしましたら開会の挨拶に一言もサッカーという言葉を入れてないのですね。スポーツの振興ということを短い中にうたっているのです。川淵さんの話は、サッカーを核としてスポーツが地域にだんだんと広がって行き、サッカーはあくまで最初のきっかけだからということで、サッカーという言葉を使わなかったのだと思ひます。練りに練った言葉だったようです。それがまだ一年経っただけですからうまくいったかどうかはこれからの問題だと思ひます。例えば鹿島町という人口4万5千人の町が燃えるというのはすごいなと思ひ、

このあいだのJリーグのアントラーズとヴェルディとの試合を見ていたわけです。やっぱり大都会というのは駄目ですね。川崎の方の応援団は、はいってるのですけれど応援がばらばらなのです。こっちで100人あっちで100人、ばらばらに応援して揃わないのです。統制取れているのがいいか悪いかわかりませんが、アントラーズの応援は見事に真っ赤に、あのユニフォームの色と同じものを着まして上に旗を広げたり、応援が始まると見事に揃ってましたね。聞きましたら、4万5千人の内7千人が国立競技場にバス何十台とJRの臨時列車を仕立ててきているということで、やっぱり鹿島にはサッカーから、だんだん広がってスポーツが根付いていくかたちに今後はなっていくかなという気がしているわけです。

今まではバレーボールとかラグビーをとりましても企業名で対抗していますよね。バレーボールも富士フィルムだ、新日鉄だということで企業名ですし、唯一都市対抗だといっていた伝統ある野球も実際は全部企業ですね。企業中心で、一企業にその都市で負けたチームから5人ぐらい補強選手を入れているというだけのチームですのであれも企業対抗ですね。ですけれどこれからは企業もメセナ的にお金を出して住金が鹿島を支えるようなかたちにはなっていくでしょう。さらに私は、地域中心型のいわゆるヨーロッパタイプのクラブ組織が出来ていったらいいなと思うわけです。体協でもドイツに視察団を出したりしながら地域とスポーツということを心掛けていて、それにはJリーグというものが参考になるのではないかなと思います。例えば今度はジュビロ磐田というのが入ってきましたね。中山選手が大変有名で、難しい磐田という地名を全日本に知らせたというのは大変なスポーツの力だと思うのです。磐田(いわた)といっちゃいけないんですってね。磐田(いわた)といってちょっとアクセントが違うのです。全国的に発音も伝わるくらい、スポーツと地域は密着してきているのかなと思っているわけです。そういうかたちで私は経済が発展してくると、スポーツは地域に浸透していくかたちに

なっていくと思います。

さきほどGNPとスポーツの関係のお話をいたしましたけれど、ある程度豊かにならないとスポーツを楽しむゆとりというものがないと思うのです。やっとならば一人当たり国民総生産でトップレベルになってきた、そうすると物質的にはもうこれ以上モノを買ってもしようがない。東京の場合は家が狭いから家が欲しいという欲望がありますが、地方までいきますと住宅はもうりっぱなものが出来ていますし、物的な豊かさはある程度のところまでできていると思うのです。そうするとこれからはやはり豊かさというのは、時間的なゆとりというところにウエートが移っていくと思うのです。そこで私は、スポーツの果たす役割は非常に大きくなっていくと思うのです。経済発展の過程では、スポーツは外に向かってはなばなしの成果を示す上で必要だったわけです。経済が発展してきた段階では、今度はスポーツは豊かさを感じさせるための方策になっていく、今そこになりつつあるのではないかなと思います。ただ、一人当たりGNPと楽しむ時間が、日本の場合は完全に他の国の比例の線に乗っかっていないというのは、まだそこまで時間的なゆとりが出ていないからではないかなと思うわけです。ですから今後日本人の豊かさの対象は物的な豊かさだけでなく時間的な充実ということになるでしょう。そうするとスポーツが草の根で栄えていく条件がさらに出来ていくのではないかなと思うわけです。

今不況ですけれども、だんだん立ち直っていくと思いますので、そうなってくると日本経済のあるいは日本企業の課題は、労働時間の短縮になってくると思うのです。労働時間の長さは世界的にも批判されておりますから、有無をいわず実行していかなければいけないし、世界の批判に應えるだけでなく、日本人の方も物的にはもうある程度満足しているところへ来ているのだから、今度は時間を楽しむ方向にいくんだよと、若い人を中心に時間短縮という要求が出てきていると思うわけです。今度の不況について、もちろんバブルがはじけたいろんな悪影響があるわけですが

ど、今までの不況と比べて違う特徴は、民間消費支出という私たちの消費が伸び悩んでいるということです。従来、日本は高度成長期から円高デフレを乗切ってバブルに至る過程では、民間消費支出という私たちの消費は常に伸びていたわけです。景気の悪い時には下支え役の作用をし、いい時にはひっぱっていくリード役をしていたわけです。ところが今回の不況ではマイナスにはなっておりませんが、民間消費支出は完全に伸び悩んでしまっていて、これが立ち上がらないために不況が長く続いているわけです。従来、民間消費支出は不況下でも伸びていますから、ある時期になりますと、自動車の設備が足りないよということで設備投資ができて、景気が立ち直っていったわけです。今回は消費者はお財布の紐を絞めたままということで、今朝の新聞ですと百貨店売上高は23ヵ月間、前年同月比でマイナスです。ですから百貨店の売上高だけをとりますと、昭和63年ぐらいの水準に戻ってしまっているわけです。1988年ですからちょうどバブルがふくらんできたところですけどそこまで戻ってしまいました。87、88、89、90の4年間が好景気ですから、バブルの途中のところに戻ってきてしまっているわけです。百貨店だけで判断するわけではなくて、例えば青木、青山のようなところは背広が売れたりしていますので消費全体としては落込むところまではいっていません。ですから国民というか、消費者は物質的消費ではなくて、もっと時間を楽しむ消費へお金を使うように変わっていくのではないかと。ですからこれからは景気の立ち直りの場合にも経済はそういう方向を考えていかなければいけないのではないかなと思うわけです。

昨年ヒット商品は、商品ではないサービスですけど、みんな頭にJがつくということで3Jと呼ばれているんですね。一つはさっき申し上げたJリーグ、もう一つはジュラシック・パークという恐竜の映画、大ヒットです。もう一つは先生方はご存じないと思いますが、ジュリアナ現象といまして芝浦の方のディスコでのヒットです。この3つが昨年のヒットです。日本経済新聞が毎

年ヒット商品を発表するのですが、平成5年のヒット商品の東の横綱がJリーグです。ジュラシック・パークが関脇、ジュリアナは小結ということでこの3つが上の方にいるんですね。なぜ3Jを申し上げるかといいますと、3つとも物を買うのじゃないのですよね。時間を楽しむためにお金を使ってヒットしたわけですね。だからこれから景気を立ち直らせていくには、もちろん新しいものがでてくれば買うし、自動車の買い換えも出てくるが、合せて消費拡大は時間充実型消費の方に移っていくのではないかなと思っているわけです。

そうなってくるとスポーツは、経済成長に関わってくるのではないかなと思うわけです。例えば、Jリーグでは国立競技場が一杯になれば、その入場料が上がるわけです。それに伴ってのJリーググッズの売上が1500億円ぐらいあるのではないかなといわれています。ですからスポーツが盛んになってそれに伴ってものも売れてくるというようなかたちで、これから経済にとってスポーツが果たす役割が大きくなるのではないかなと思うわけです。今までは外に向って、スポーツを巧く使って日本ありきでここまで来たわけですけど、これからはむしろ国内的にスポーツの存在というのが経済成長に大きく関わっていくのではないかなと思うわけです。ですから地域でスポーツが盛んになって、それがマクロの経済にもスポーツへの消費が増える、或いはスポーツに関する商品が売れるというかたちで影響してくるということで、私は経済とスポーツとの関係は目が離せないと思うわけです。先程も話しましたが、もっとそういう草の根的なところにお金をつけるべきだというふうになっているわけです。ですから学校対抗でいろいろスポーツを競うというのも段々限界がくるかもしれませんけれども、例えば一橋大学が強くなるのと同時に、この大学が中心になって国立市との関わりでスポーツが伸びていくことが期待でき、私はそのようなことに国は大いに予算をつけるべきだと思うわけです。

私は今までいろいろな仕事をしてきましたけれども文部省だけは全く関係のない役所だったので

すね。文部省は、新しい分野へのお金の獲得という点では大蔵省に対してあまり強くないような感じなのです。今、国の財政は困っていますからどこかを削らないと浮いてこないわけです。一度文部予算も見直してほしいと思います。それから体育という教科自体ももうちょっと楽しくできるようなかたちに変えないといけない。といいますのは、私は日本体育協会という言葉が好きではありません。私の世代でスポーツ嫌いというのは大体子供の時に体育で苦勞している人達なのです。飛び箱がとべなかったとか懸垂が出来なかったとかということで体育の成績が悪かったという人がスポーツ嫌いに多いものですから、体育の時間も楽しくと——体協ではエンジョイスportsといっているのですけれども——楽しむというかたちに変っていく必要があるのではないかなと思っています。合せてそういうスポーツが地域で楽しめるように、学校の校庭もサッカーが出来るように、コンクリートではなくて芝がしけるようになったりすれば、それが子供たちのためになり、地域でサッカーをしようとかあるいは他のスポーツをしようというときに利用できるのではないかと思います。ですから地域にもそういう皆で使えるような施設が出来て、でもそれだけでは正しいSportsにはならないので指導者もそこに必要になってくるといけないかということで、体協は指導者養成にも力を入れています。

大学の方のご予算も苦しいようですが、日本体育協会のぶちあげた話をしますと、体協の予算は平成5年度の補正で大体43億円です。そのうち国庫補助金が4億7千万円ですから、10%位しかないわけです。それでは10%の国庫補助金しかないのあとどうやっているのかといいますと、あとは寄付に頼るということです。日本自転車振興会補助金が7億円以上です。それから日本馬主協会連合会からもいただく。あるいは財界募金からもいただく。そういうところからの寄付金と、加盟団体から毎年の加盟料とかを頂いて賄っているわけです。それが数年間赤字でまいりまして、私が会長になりました時には4億5

千万円の累積赤字でした。今年2億5千万の赤がでまして、累積7億円の赤字をこの年度末で処理は出来ませんので、借入で繰り越していかなくてはならないということになっているわけです。そういうかたちで親になっている体協も苦しいのですけれど、地方の体協も苦しいところがございますし、競技団体も豊かなところとそうでないところがあるというわけです。

そこででてまいりましたのがサッカーくじです。一応体協とJOCがお願いするというかたちでスタートはしているようです。昨年暮にも国会に呼ばれて、議員さんの中で与野党、超党派でSportsくじ実現のプロジェクト・チームを作っております。麻生さんが座長です。皆さんのご理解をえようということで女性の議員も各党から参加し、文部大臣経験者も参加して、何回か会合を重ねております。私と古橋さんが呼ばれて、何故必要かということで、古橋さんは国際的な選手の育成とか、国際的な競技場があるとかの必要性を、私の方は地域に根づいた施設、指導者の養成、Sports少年の育成であるとかということにお金が必要だということをお願いをしております。自民党政府の段階で法案の文章までできているそうです。実現は2年か3年の間にはあるのではないかとわれています。ギャンブル性のものでSportsを賄っていいのかという議論は起るかと思いますが、そこに一つ財源を求めていかなければならないと思っているわけです。その結果Sportsが皆のものになってくる。そしてこれから高齢化社会になってまいりますと、老後の自由時間が長くなるわけですから、若い頃からやったSportsを楽しみながらなおかつ健康を維持するというかたちになっていけばいいのではないかと考えております。

Sportsくじのようなあんまり色付きじゃないものの方が本当はありがたいわけです。しかし体協としてはスポンサーというかたちでお金をいただいています。それは特定の冠ではなくて、さっき申し上げたエンジョイスportsという運動に対して、六つの会社がスポンサーについてくれまし

て、それは国体の中にも看板などを出さしてもらおうというかたちでやっているわけです。極端な意見としては、例えば国体にマラソンを取入れてゼッケンに企業名を入れて走らせればそれだけでも億のお金になるのではないかと、色々案はございますけどまだそこまでは踏切っておりません。体協は英語に訳しますと、ジャパン・アマトゥール・スポーツ・アソシエーションです。J A S A (ジャサ)です。今まではそれがはっきりしていたのです。プロ野球は入っていません。相撲も国技館の相撲は入っていません。プロのゴルフも入っていません。アマの相撲、アマのゴルフ、アマの野球は入っています。はっきり分れていたわけ。ところが最近になりまして、例えばJリ

ーグ、プロです。これが日本サッカー協会から分れたわけです。日本テニス協会からは伊達公子というようなプロがどんどん出ている。そうするとアマチュアスポーツという肩書きに偽りありということになってきます。だんだんプロとアマの境というのが無くなってくのではないかと。プロ野球などは余りにもはっきり分れているために、プロ野球の人気にも関わってくるとの苦情があります。余りにもプロアマの境がきびしすぎるのではないかと意見が出てきたりしています。

ここで私の話は終りにして、あとは皆さんのご質問に答えるかたちにしたいと思います。ご注文、ご要望がたくさんあると思いますので。

## 【意見交換】

日本体育協会新会長に対する大きな期待を反映するかのように、多くの率直な質問や意見が出された。しかし、質問のきびしさのわりには、実になごやかに実りある意見交換であった。

高原氏は、「選手強化の仕事がJOCに移った今日、体協の性格ははっきりした。体協の役割は、Sport for all・国民スポーツ・草の根スポーツの振興にある」と言明し、「地域中心型の、たとえばドイツ型のクラブ組織の発展」を構想していると述べられた。われわれは、氏の基本姿勢と構想に大いに共感しつつ、この構想の理解を深めるかたちで質問と意見が出されていった。

すなわち、「ドイツ型のクラブ組織のありかたを日本の将来のモデルと考えられているようだが、日本のように、スポーツにおける自主・自立の精神が発達しておらず、また、社会に、勝利至上主義や商業主義へ向かうのをチェックする機能がないうところでは、難しいのではないか」。「ドイツの場合の草の根スポーツ発展の基盤は、大々的な施設建設計画・ゴールデンプランとその実現にあったわけで、日本でもまず考えるべきはその事で

はないか。施設建設の財源を公的に保障し、権限を大幅に自治体に移管する—このようなことがまず必要なことではないか」。あるいは、「“開かれた体協”を標榜している点は、大賛成だが、具体的にどうするかを検討していく必要があるのではないかと。広く社会に問題を投げかけ、社会から広く意見を吸い上げる組織がつけられていかねばならないのではないかと。現状では、会長の私的諮問機関がいつのまにか公的な機関に替わったりしている。どうも審議機関の重要性が認識されていないように思うがどうであろうか」。

高原氏は、これらの難問に真剣に答えようとしていた。会長に就任した矢先であるだけに、納得のいく答えを得ること自体無理であったが、お話を伺いながら、赤字の7億や10億にはびくともしないおおらかさと、問題を真摯に受け止めて解決していこうとする理知的でヒューマンな人柄に新たな希望を感じることができた。莫大な赤字をはじめ、多くの難問にあえぐ体協に、ジャンヌ・ダークのように現れ出た氏の活躍をおおいに期待したい。

(文責：関 春南)